『六祖法宝壇経諺解』『真言勧供・三壇施食文諺解』の音韻的特徴

伊藤智ゆき

0．序論

中期朝鮮語文献『六祖法宝壇経諺解』（以下『六祖』と略す）は木活字で刊行された本であり，全部で３巻３冊である。六祖大師恵能の語録を門人が編集したものを，朝鮮語訳したものである。上巻（序を伴う）・中巻は原刊本と見られるが，下巻は復刻本である。

『真言勧供・三壇施食文諺解』（以下それぞれ『真勧』『三壇』と略す）は，1496年，併せて刊行された。各１巻１冊。『六祖』と同一の木活字で刊行されている。『真勧』『三壇』は仏家の日用法事を扱ったものであり，真言・陀羅尼も数多く記載されている。

『六祖』には跋文がないため正確な刊行年は不明である。しかし『真勧』『三壇』の跋文によると，仁粋大妃の命令で跋文を書いた僧侶（誰であるかは明記なし）が『六祖』と『真勧』『三壇』を国訳し，木活字でそれぞれ 300 件，400 件を同時に印出したという。安秉禧（1992：529-530）はこの記載に基づき，『六祖』『真勧』『三壇』はすべて，学祖という僧侶の翻訳だと推定した。

確かに，『六祖』と『真勧』『三壇』の刊行には，何らかの関わりがあったことは間違いない。しかし，これらの文献が学祖という一人の人物によって作成されたかどうかは，これだけでは判断できないだろう。実際，この見解の妥当性は，音韻的に十分裏付けられてはいない。筆者は以前，『六祖』の句音調について研究し，その性質が『真勧』『三壇』の句音調とは異なること，そしてこれらの文献が同一人物によって作成されたとは考えにくいことを指摘した[1]。ただその時点では，『六祖』の句音調に関する基本的な問題以外は，十分検討できなかった。

本稿では，『六祖』（上巻・中巻を対象とする），『真勧』『三壇』の音韻的特徴のうち，特に句音調，母音調和について改めて検討した上で，これらの文献の作成経緯を推測する。またそれにより，筆者の先の研究における不備を補うことも目標とする。

中期朝鮮語の音韻体系は表１の通り。転写法は福井玲（1989）を一部修正したものである。

	子音																			複子音					
ハングル	ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅱ	ㅂ	ㅸ	ㅅ	ㅿ	ㅇ	ㆁ	ㆆ	ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅎ	ㅅㄱ	ㅅㅂ	ㅂㄷ	ㅎㅎ	ㅂㅅ	ㅂㅈ
転写	g	n	d	r	m	w	b	v	s	z	’	ŋ	✝	j	c	k	t	p	h	sg	sb	bd	hh	bsg	bsd
推定音価	k	n	t	l✏r	m	w	p	β	s	z	ɸ✏ɦ	ŋ	✝	ts	ts^h	k^h	t^h	p^h	h						
	母音							重母音					アクセント		
ハングル	ㅏ	ㅓ	ㅗ	ㅜ	ㅡ	ㅣ	ㆍ	ㅑ	ㅐ	ㅘ	ㅝ	ㅙ	平声	去声	上声
転写	a	ə	o	u	ɨ	i	ʌ	ia	ai	oa	uə	iuiəi	_	.	:
推定音価	a	ə	o	u	ɨ	i	ʌ								

表 1　中期朝鮮語の音韻体系

中期朝鮮語は，高低の対立からなる，昇り核アクセント体系を有すると考えられている。昇り核アクセント体系においては，最初に高くなる位置が重要な意味をもつ。一旦高くなった後の音調は，音韻論的には非弁別的である[2]。

中期朝鮮語文献では，「平声」（＝低調，Ｌ），「去声」（＝高調，Ｈ），「上声」（＝上昇調，Ｒ）

[1] cf. 拙稿（2002a）。
[2] cf. 門脇誠一（1976），福井玲（1985）など。

という３つの音調が傍点で表されているが，中期朝鮮語のアクセント体系を考える際には，ＲはＬとＨが組み合わさったものだと解釈する。Ｒは原則的に語頭にしか現れない。

アクセントは弁別的特徴であるため，本稿で検討する『六祖』『真勧』『三壇』の間にほとんど違いは見られないが，非弁別的特徴である句音調には，後述のようにかなりの違いがある。

1．句音調

1.1 『六祖』

1.1.1 体系

中期朝鮮語においては，一旦高くなった後の音調は音韻論的に非弁別的であるが，この原則は基本的に「句」を単位として適用され[3]，それより大きい単位には適用されない。また，「音韻論的に非弁別的である」といっても，どのように現れてもよいというわけではない。実際には，最初に現れるＨ以降の音節数によって，現れる型はほとんど決まってしまう。たとえば『釈譜詳節』や『月印釈譜』では，一旦Ｈになった後の音節数が，そのＨの音節を含めて２音節であれば，その２音節はＨＨで現れる傾向がある。同様に３音節であればＨＬＨ，４音節であればＨＨＬＨになる傾向がある[4]。

このように，中期朝鮮語には，音節数と相関性のある句単位のイントネーション（＝句音調）が見られる。この音節数によって決まる点と，句単位である点は，大抵の中期朝鮮語文献に当てはまるが，実際に現れる句音調の型は，文献によって異なる場合が多い。

本稿で取り上げる『六祖』の句音調は，更に複雑である。拙稿（2002a）で述べたように，『六祖』の句音調には，「接続形」と「言い切り形」の明確な区別がある。接続形とは，その後に続けて発音するつもりの形であり，言い切り形とは，その後に続けて発音するつもりのない形である。『六祖』では，漢文部分と諺解文部分が交互に現れるが，言い切り形は諺解文の最終文末（必ずしも文としては完結していない）[5]か，諺解文中に挿入された注釈文の末尾に現れる。接続形はそれ以外の箇所に現れる。

『六祖』の句音調の体系を以下に示す。『六祖』では，句音調のかかる単位が１音節の場合，つまり最初にＨが現れると予想される音節によって句が終わっている場合にも，句音調が働いている。１音節言い切り形と２音節接続形には，２つの形が現れる。２音節接続形はほとんどの場合ＨＬで現れる。

	接続形	言い切り形
１音節	Ｈ	Ｈ|Ｌ
２音節	ＨＬ（ＨＨ）	ＨＬ
３音節	ＨＬＨ	ＨＬＬ
４音節	ＨＨＬＨ	ＨＨＬＬ
５音節	ＨＬＨＬＨ	ＨＬＨＬＬ
６音節	ＨＨＬＨＬＨ	*ＨＨＬＨＬＬ[6]
７音節	ＨＬＨＬＨＬＨ	ＨＬＨＬＨＬＬ　…

[3] 句は，金完鎮（1973），金星奎（1994）では「気息群」，門脇誠一（1976）では「文節」と呼ばれている。
[4] cf. 金完鎮（1973：77-91），門脇誠一（1976：22,25）。
[5] 言い切り形は，諺解文中にある地の文・会話文の末尾などには原則的に現れない。
[6] ６音節言い切り形の例は見つかっていない。

例）[7]

接続形

1 音節　hʌ_go. /　「して」（序 13a3）

2 音節　’ar：’o_/　「知り」（上 22a3）｜　’ar：miən. /　「知れば」（上 10b5）

3 音節　’an. pas_gi. /　「内外が」（上 98b6）

4 音節　mə_mɨ. rɨ. sin_dʌi. /　「留まられた所に」（序 18a8）

5 音節　’a_ni. ro_so. ŋi_da. ］　「～ではありません」（中 76b3）

6 音節　mas_di. si. də_ni. ŋis_go. ］　「授けられたのですか」（上 42b6）

7 音節　sa：mʌ_si. nʌ_ni. ŋis_go. ］　「見なしていらっしゃるのですか」（中 105a5）

言い切り形

1 音節　hʌ_go_］†　「（…と）言い」（序 19a7）｜　na. ］†　「出て」（上 3b8）

2 音節　dʌ_’oi_ri. ra_］†　「なるだろう」（上 60b1）

3 音節　’əb：sɨ_ni_］†　「ないが」（中 85b1）

4 音節　’əb：sɨ. ni_ra_］†　「ないのだ」（上 49b3）

5 音節　hʌ_ri. ro_so. ŋi_da_］†　「します」（中 67a3）

7 音節　’əb：sɨ_ri. ro_so. ŋi_da_］†　「ないでしょう」（中 76b5）

1.1.2 句の切れ目

中期朝鮮語文献のイントネーション句は，一般的に想定される「句」とは異なる。1. 1. 2 では，中期朝鮮語のイントネーション句とはどのようなものか，裏返せば，「句の切れ目」はどういうところに存在するのか，ということについて，『六祖』を中心に検討する。

『六祖』において，句の切れ目は，各形態素の性質に基づいて形成される[8]。形態素は，次のように分類される[9]。

- 原則的に句の切れ目を形成するもの
- 原則的に句の切れ目を形成しないもの
- 句の切れ目を形成したりしなかったりするもの

1.1.2.1 原則的に句の切れ目を形成するもの

このグループに属すものは，独立性の高い形態素である。

Ⅰ．いわゆる名詞・動詞など，単独で，もしくは助詞・語尾を後続させて使われるものや，複

[7] 以下，句の切れ目は ／，諺解文末は ］，注釈文末は ｝で表す。また言い切り形が現れる部分（諺解文の最終文末，注釈文の末尾）は†で表す。『六祖』の出典は，序・上・中巻の別，張，表(a)裏(b)，行の順に表す。『真勧』『三壇』の出典は，『真勧』(真)・『三壇』(三)の別，張，表(a)裏(b)，行の順に表す。「序・上・中，真・三」は，必要に応じて省略することがある。

[8] 15 世紀中葉文献では，３音節句音調はＨＬＨ，４音節句音調はＨＨＬＨで現れるのが普通であるが，例外的に，句の切れ目によっては説明できないＨＨＬ，ＨＬＨＬなどが現れることがある。『六祖』にも，このような例外的句音調が断片的に見られる（界 giəi：/nʌn. /gʌ：zi. ni_/　「界は果てであるが」(上 45a5)，’a：rʌ. si_r/i. ’o_］　「お知りになるだろうか」(上 13a4）など）。

[9] 筆者とは若干観点が異なるが，趙義成（2002）は，中期朝鮮語のアクセントに関して「強い境界」と「弱い境界」というものを設定している。

合語（複合名詞・複合数詞，一部の複合動詞など）の後部要素が，このグループに属す。動詞起源の助詞や，語尾の一部もこのグループに属す。これらは，直前に句の切れ目を形成する。一部の派生接辞も結合する要素との間に句の切れ目を形成する[10]。

例１）　単純な例

’ir_hu. mɨr_/ni_rʌ_sia. dʌi_/　「名前をおっしゃるには」（序 5a4）
ba_mʌi. /nan：/’a. gi_rʌr. /　「夜に生まれた赤子を」（序 10a4）
na_mo_/sa. gə_nʌr. /　「木（を）買うと」（上 3b6）

例２）　複合語[11]

mɨrs. /giə. ri_/　「波が」（序 21a2）… mɨr. 「水」
gɨd. /go. /　「巴鼻」（序 5b6）… gɨt. 「端」，goh. 「鼻」
sɨ. mɨr_/nəi：həi_/　「24 に」（序 11a6）… sɨ. mɨrh「20」，nəih：「4」
do_ra. /’o. sia_/　「帰っていらっしゃって」（上 35b1）… dor：-「回る」，’o_-「来る」（’o. はアクセント規則によってＨに交替している）
講 gaŋ：/ho. mʌr_/mas_/na：ni_］†　「講ずることに値う（あう）が」（上 40b3）… maj_-「迎える」，na_-「出る」（na：は意図法先語末語尾が付いたもの）

例３）　hʌ_-「～する，である」を含む動詞・形容詞は，必ず hʌ_- の前に句の切れ目がある。

’i. /gʌd. /hʌ. ’ia_/　「このようであって」（上 66a5，hʌ. はアクセント規則によってＨに交替している）
’i. /gʌd. /hʌ_ni. ra］　「このようなのだ」（中 93b5）

例４）　助詞・語尾・接辞

① 始発・到着の助詞 bɨtə（動詞 bɨt_-「付く」に由来），与格助詞 dʌriə（動詞 dʌ_ri. -「連れる」に由来）などの助詞。

’a：rʌi_/bɨ_tə. /　「前から」（中 23b6）
sa：rʌm_/dʌ_riə. /　「人に」（上 69a3）

② 複数を表す接尾辞 dʌrh は，独立性が高い。また使役・他動の接尾辞（’i，’o）も，句の切れ目を形成する傾向がある[12]。接頭辞 hois「ぐるぐると」も直後に句の切れ目を形成する（ただし後続する動詞によって句の切れ目が生じているとも解釈できる）。

’u. ri_/dʌr. hi/　「我々が」（上 12b4）
də：rə_/’io. mʌn_/　「汚染することは」（中 97a3）
də：rə_/’i. di_/mod：/ho. mi_/　「汚染しないことが」（中 97a4）
hois_/dor：’o_/　「巡り」（中100b6）

---

[10] 以下，Ⅰ. で述べることの多くは，金完鎮（1973），金星奎（1994）等でも指摘されている。
[11] nui：’ɨc-「悔やむ」も，語源は定かでないが，’ɨc の前に句の切れ目があるようである。nui：/’ɨ_cu. mɨr_/「悔やむことを」（中 27a1）
[12] 「dɨ_ri. ’o_sio_siə. /　「垂らせたまえ」（中 68a5，84b7）」という例もある。しかし命令法語尾 siosiə のアクセントは sio. siə と考えられるため，これを dɨ_ri. /’o_sio_siə. / や dɨ_ri. ’o_/sio_siə. / のように分析することはできない。

③ 与格助詞 ’ʌigəi（属格助詞 ’ʌi に gɨ_ŋəi_「そこに」が結合し，縮約）[13]，hʌganiaŋhʌ「驕慢にふるまう」（由来不明，hʌ＋ga＋n＋’iaŋ＋hʌ か？）などにも，句の切れ目が生じているようである。

sa:rʌ_mʌi. /gəi_/　「人に」（上 69a2，中 65a5）
hʌ. ga_n/iaŋ_/hʌ. ’ia_/　「驕慢にふるまって」（中 24b1，24b3）

Ⅱ． 漢字語が「漢字＋漢字音」で表記されている場合，その１字１字が１つの句を形成する。つまり，各「漢字＋漢字音」の前後に必ず句の切れ目が存在する[14]。

このことは，中期朝鮮語文献の作成された経緯を考えると，それほど不自然ではない。世祖朝刊経都監刊行の数多くの仏典諺解においては，全体の翻訳が一通り終わった後に，各漢字音が記入されていったと推定されている[15]。『六祖』の制作手順は不明であるが，おそらく同様の手順で作成されたために，「漢字＋漢字音」は前後とのつながりが薄れ，独立性の高いものになったのではないだろうか[16]。

弟 diəi:/子 jʌ. /nʌn. /　「弟子は」（上 85b1）
布 bo:/施 si. /供 goŋ_/養’iaŋ:/’ɨ. ro_/　「布施供養で」（上 89a5）
性 siəŋ:/’i. ’o_/　「性であり」（中 72b5）

Ⅲ． 『六祖』独自の傾向に，分綴表記[17]と句音調の相関性がある。『六祖』は，原則的に連綴表記を採用しているが，終声が m，n，ŋ，r で終わるものは，分綴表記されることがある[18]。そして，分綴表記されているものは，語幹の直後に句の切れ目が生じる傾向がある。

jams:gan_/’i. na_/　「しばらくの間でも」（中 56b1）
jiuŋ:/’i. ’o_/　「僧であり」（序 15b2）
sa:rʌm_/’ɨ. ro_/　「人に」（上 15b3）
　　cf. sa:rʌ. mʌ_ro. /　「人に」（上 10a2）
diər. /’i. ra_} †　「寺である」（序 20a6）

---

[13] cf. 金星奎（1994：81-82）は，gɨ_ŋəi_ を句音調が適用されないものと解釈している。

[14] 『六祖』においては，「漢字＋漢字音」に後続する１音節の語尾・助詞などはHで現れるのが原則であるが，いくつかLで現れるものもある（記 gɨi. /録 rog. /di_/（序 5b2），一’ir. 切 ciəi. 處 ciə:/-’əi_/（中 3b8）燈 dɨŋ_/光 goaŋ_/’i_/（中 6b8），無 mu_/nʌn_/（中 12b5）など）。語尾・助詞に前接する漢字音のアクセントがH乃至Rであれば，漢字音と語尾・助詞が１つの句として発音されていると解釈することも可能かもしれないが，Lの場合，句音調によって説明できない。漢字音に後続する語尾・助詞がLで現れる例は他にもあるが，実は，それらは１例を除きすべて中巻の例である。中巻にはアクセントの誤表記と見られる例も多い（mo. mʌr_/su_mə_/「身体を隠して」（中 51b4，本来は su. mə_），’iə_hɨi_miən_/「離れれば」（中 53a6，本来は ’iə_hɨi. miən_），mon_jiə. /「まず」（中 8a7，本来は mon_jiə_）など。序・上巻にはそのような例はほとんどない。原本においてもそうなのか，今後確認する必要がある。）。これらの例も，すべてアクセントの誤表記（傍点の脱落）であった可能性がある。

[15] cf. 志部昭平（1983：9），伊藤英人（2003：55-56）。ただしこの場合の漢字音は，人工的な東国正韻式漢字音である。

[16] ハングルのみで書かれた漢字語も，「漢字＋漢字音」ほど独立性は高くないが，語源意識のためか句音調の影響は受けにくいようである。たとえば「siog. /jiər. /’əb:si_/ 「徒に，むなしく」（上 12b1）」の siog. jiər. という部分は，語源は不明であるが，音節構造から漢字音（入声）と意識されていた可能性が高い。それ故，各音節ごとのアクセントを生かそうと，入声対応のHで現れているのだろう。

[17] 先行音節の終声と後続音節の中声を，リエゾンせずに分けて書く表記のこと。リエゾンして書かれたものは連綴表記という。

[18] cf. 金東昭（2000：25）。

cf. diə. ri_/　「寺が」（上4b8，中51a5）

２音節接続形は通常ＨＬであるが，分綴表記されたものはＨＨで現れる傾向がある。これも語幹の直後に句の切れ目があるためだろう。

don：/’ʌr. /　「お金を」（上 3b7）
jiuŋ：/’i. /　「僧が」（序 10a3）[19]
sin. /’ɨr. /　「靴を」（上 27a3）
siŋ. /’i. /　「尼が」（中 49b7）
cf. mo. mʌn_/　「体は」（上 15b6）
mo. mi_/「体が」（中72b8）
nʌ. mʌr_/　「他人を」（中10b5）
so. nʌr_/　「手を」（中108b8）

1.1.2.2 原則的に句の切れ目を形成しないもの

このグループに属すものは，独立性の低い形態素である。語尾・助詞の多くは，このグループに属す。また，「（～する）時（に）」を意味する jəi_ や，動詞語幹に付いて「～するようだ」を意味する dʌs. hʌ_- などが，このグループに属す。このグループに属すものの特徴は，単独で用いられることが原則的にないということである。

例１）　語尾・助詞
尊敬法先語末語尾 si，説明法語尾 da，主格助詞 i など多くの語尾・助詞は，環境によりＨまたはＬで現れる。

hʌ. si. ni_ra. ］　「なさったのである」（序 20b7）
hʌ. si_ni. /　「なさったが」（序 11b1）
hʌ_da. /　「する」（序 12b4）
’iə：da_/　「開く」（中 62b6）
’ir_hu. mi_/　「名前が」（序 5b4）
sa：rʌ_mi. /　「人が」（上 54a1）

例２）　jəi_「（～する）時（に）」
jəi は直前に無核のもの（＝Ｌ）が来た場合，Ｌで現れる。したがって jəi のアクセントはＬと見られる[20]。

hʌr_jəi_/　「する時」（中 104b3）

以下の例では，句音調によって jəi の音調が交替している。ただしＬで現れる場合，jəi の直前に句の切れ目があると解釈することもできる。

mʌiŋ_gʌ. rʌ. sir_jəi. /　「お作りになる時」（序 17a6）

[19] ただし jiuŋ：’i_/（上 85b4）という例外も１つある。
[20] 『真勧』では si_mɨr_jəi. /　「植える時」（47b1，47b5），細 siəi：/末 mar. /hʌr_jəi_/　「細末する時」（49b8）のように現れ，jəi のアクセントがＬであるかＨであるか不明である。

jiə_mə. sin_jəi. /　「若かった時」（序 7a8）
’o_rʌ_sir. jəi_/　「登られる時」（上 1b7）
dʌ_tor. jəi_/　「戦う時に」（中 8b6）

例３）　動詞＋dʌs. hʌ_-　「～するようだ」は，原則的に dʌs の前に句の切れ目がないようである。ただし，dʌs の前に来る動詞のアクセントがＬであれば，dʌs は本来のアクセントであるＨで現れ，dʌs の前に句の切れ目があるかどうか判断できない。

’a:dʌs_/hʌ. do_so. ŋi_da. ］「知るようでございます」（上 38a4）
gu. rum_/ji_pii. dʌs_/hʌ. ’ia_/「雲が集まるようで」（中 99b3）
nib. /bdɨ. dʌs_/hʌ_go. /「葉が浮かぶようであり」（上 64a5）
ju_dʌs. /hʌ. ’ia_/「与えるようで」（序 3b5）
陣 din. /hʌ_dʌs. /hʌ. ’ia_/「陣取るようで」（上 11a4）

例外として，動詞と dʌs. hʌ_- の間に di/mod:/ 「～できない」が挿入されると，dʌs の前に句の切れ目が生じる[21]。

得 dɨg. /di. /mod:/dʌs. /hʌ_ni. /「得られないようであるので」（上 55b7）
jʌ. ra_di. /mod:/dʌs. /hʌ_ni. /「増長できないようであるが」（上 66a4）

1.1.2.3 句の切れ目を形成したりしなかったりするもの

このグループに属すものは，独立性の比較的高い形態素である。いわゆる形式名詞や，「（～する）所」を意味する dʌi.，一部の語尾がこのグループに属し，直前に句の切れ目を形成する。また一部に冠形詞形を含む語尾は，その冠形詞形の直後に句の切れ目を形成する。比較的１語としての意識が強い複合動詞なども，このグループに入る。h を終声にもつ１音節用言は，媒介母音 ʌ/ɨ や意図法先語末語尾 o/u が付くことによって見かけ上 hʌ_- を含むと，句の切れ目を形成することがある[22]

例１）　形式名詞 dʌ.，sʌ.

bʌ. ra_/zʌ_’on. /dʌn. /　「望み申し上げるには」（序 17a6）
’is_non. /di. ra_］　「あることである」（上 77a2）
　cf.　bʌ. ra. /zʌ_’on. dʌn_/　「望み申し上げるには」（上 19a6）
　　hon. di_ra. ］　「したことである」（上 40a8）
mo_rʌr. /si. ni_/　「知らないことであるが」（中 110b3）
　cf.　kɨr. si_ni. /　「大きいことであるが」（上 51a1）

例２）　dʌi.「（～する）所（に）」
dʌi は，直前に無核のものが来ると，Ｈで現れるため，dʌi のアクセントはＨと見られる（以下の例では，dʌi の前に句の切れ目があるかどうかは不明）。

[21] 次節で述べるグループは，同一の用法であっても句の切れ目を形成したりしなかったりするという点で，このグループの性質とは異なる。
[22] cf. 金星奎（1994：42-43），趙義成（2002：35）。

hʌn_dʌi. /　「１つの所に」（上 47a3）

次の例も，句音調によってＨになっているのか，dʌi の前に句の切れ目があるのか不明である。

’ə_dɨ. ’un_dʌi. /　「暗い所に」（上 80b4）

句の切れ目があるものとないものを比較すると以下の通り。

dur：/dʌi. rʌr. /　「置く所を」（中 110b3）
　cf.　gan：dʌi_rʌr. /　「行く所を」（序 23b2）
　　bɨ_tɨn. dʌi_/　「依る所（が）」（中 22a2）

例３）　語尾

①　謙譲法先語末語尾　zʌb：/zʌ_’（両者は環境に応じて交替する。歴史的には zʌv：に由来。他に異形態として jʌb，sʌb がある。）[23]や，過去時相の先語末語尾　gə_/’ə_，恭遜法先語末語尾　ŋi_　などは，切れ目を形成することがある[24]。

sim_gi. /zʌ_’o. ni_］†　「授け申し上げたが」（序 12a2）
　cf.　moi：zʌ. ’o_mi. /　「お仕えすることが」（序 5b5）
ga_jʌr. bi_/gən_dain. /　「譬えるならば」（上 64a2）
’əs：diəi_/’ə_nio. ］　「どうしてか」（上 64a2）
　cf.　’əb：gə. ni_’oa. /　「ないが」（上 35b3）
mod：/hʌ. ’ia_/ŋi_da. ］　「できません」（中 80b5）
ga. no_/ŋi_da. /　「行きます」（中 101b2）
　cf.　’ar：ri. ŋis_go. ］　「知りますか」（中 58b2）

②　過去時相の先語末語尾　rə（də の異形態）にも，句の切れ目を形成している例が見られる。

’iər. /səi：/go. di_/rə_ra. ］　「十三所であった」（序 18b1）
nə_gi. sia_mi. /rə_si_ni. /　「お思いになることであったが」（序 24a3）
　cf.　十 sib. /六 riug. /年 niən_/’i. rə. si_ni. /　「十六年でいらっしゃったが」（序 23b8）
　　sa：rʌ_mi. rə_ni. /　「人だったが」（中72a8）

しかし　də　には，そのような例がない。

su. məis_də. si_ni. /　「隠れていらっしゃったが」（序4b3）
供goŋ_養’iaŋ：/kəi. /ho. riə_/hʌ. də. si_ni. /　「供養するようにしようとなさったが」(上14a5)
論ron_/ti. /’a_ni. /hʌ. si. də_ni. ŋis_go. ］　「論じられなかったのですか」（上43a3）
’əb：də_ni. /　「なかったが」（中49b1）

そもそも，də　と　rə　は異形態でありながら（rə　は繋辞　i　などの後に現れる），アクセント自体が異なり，də　はＨ，rə　はＬであったようである[25]。

’is_də. ni_/　「あったが」（上14a2）[26]

---

[23] cf.　zʌv/zʌ’ が句の切れ目を形成する問題に関しては，金星奎（1994：88-90, 110-112）を参照。
[24] 恭遜法先語末語尾　ŋi　は，冠形詞形語尾　n　などと同様，＊ŋ＋繋辞　i　などに遡れるか。
[25] 『月印釈譜』などでも同様である。例）「dʌ_də. ni. /　「甘かったが」（一 43b2）」，「nig_də. ni. /　「熟したが」（一 45a3, 51b6）」，「怨讐/i, rə_ra. ］　「怨みであった」（一 6b2）」。
[26] ’is_də：ni_/　「あったが」（中 51b6）のようにＲで現れる例もあるが，Ｈの間違いだろう。

də_’ɨ_də. ni_/　「増やしたが」（中97b4）
子jʌ. /i, rə_ni. /　「子であったが」（中96b2）
辛 sin_/酉’iu：/歳 siəi：/rə_ra. ］　「辛酉歳であった」（序 11b2）

③ 願望の語尾 gojiə は，通常句の切れ目を形成しないが，以下のような例がある。

bo. zʌb_/go. jiə_/hʌ. no. ŋi_da. ］　「見申し上げたいと思います」（中110a5）
cf. sis_go. jiə_/ho. dʌi_/　「洗おうとするが」（中108b4）
’əd：go_jiə. /hor. din_dain. /　「得ようとするならば」（中47a6）

zʌb の前に句の切れ目があったならば，zʌb はＲで現れると予想されるため，ここでは句音調に従ってＬで現れていると見られる。また gojiə の本来のアクセントは，sis_go. jiə_/ の例から分かるように，Ｈ－である。bo. zʌb_/go. jiə_/ のＨＬも，句の切れ目があることで本来のアクセントを反映していると見られる[27]。

④ 冠形詞形を含む語尾。nʌnira は nʌn＋ira，nira は n＋ira などに分析される[28]。過去時相の先語末語尾 gə と結合した gən は，gən の前後どちらに句の切れ目があるのか，判断が難しい[29]。

’ir_’u. nʌ_n/i. ra_］　「成すのである」（中 6a4）
cf. 行 hʌiŋ_/hʌ. nʌ. ni_ra. ］　「行うのである」（上 54a1）
ga_bʌi. ’iab. /gə_ni. ’oa_/ または ga_bʌi. ’iab. gə_n/i. ’oa_/[30]　「軽いが」（中 99b2）
’əb：/gən_ma_rʌn. / または ’əb：gən_/ma_rʌn. /　「なかったけれども」（上 66b4）
cf. ’əb：gən. ma_rʌn. /　（上 48b7）

⑤ その他，（’i）amjig 「～するに堪える，しそうだ」（＜（’i）a＋m＋jig）は，jig の直前に句の切れ目が生じることがある[31]。

hʌ. ’iam_/jig. di_/mod：da_/　「することができない，堪えられない」（上 15a8）
cf. bu_tiə_/dʌ_’oi_’iam. jig_/hʌ_ri. ’o_］　「仏になることに堪えるだろうか」（上7b2）

例４）　複合動詞

① gʌrisgi-「遮られる，遮る」，gərisgi-「滞る」は，おそらく gʌri「覆う」＋sgi，gəri＋sgi に分析できる。また hiəi’ari-「計る」は，おそらく hiəi-「計る，考える」と関係がある[32]（hiəi＋gari「分かれる」に分析できるか）。

gʌ_ri. /sgi. ni_/　「遮ったので」（序 21a3）

---

[27] ただし，以下の例のような問題がある。
得 dɨg. go_jiə. /hʌ_rin. dain_/　「得ようとするならば」（上 80b2）
「漢字＋漢字音」の後には原則的に句の切れ目が存在するはずであるが，この場合の gojiə は「得 dɨg. go_jiə. 」全体が１つの句になったような音調で現れている。もし「漢字＋漢字音」の後に句の切れ目があったならば，「得 dɨg. /go. jiə_」で現れていたと予想される。このことの原因は不明である。
[28] cf. 菅野裕臣（1982：5），金星圭（1994：94-95）。
[29] gə_ni. ’oa_/ について，金星奎（1994：96-97）は冠形詞形と解釈している。
[30] ga_bʌi. ’iab. gə_n/ の部分は例外的句音調である。
[31] 「蘭 ran_若 zia：/mʌiŋ_gʌ. ram_jig. /hʌ. do_da. /　「蘭若を作ることに堪えるだろうなあ」（序 19a2）」の例は，jig の前に句の切れ目があるかどうか不明。
[32] cf. 菅野裕臣（1982：5）。

cf. gʌ_ri. sgiə_/ 「遮られて」（中 64b8）
gə_ri. /sgium. / 「滞ること」（上 75a3）
cf. gə_ri. sgiə_/ 「滞って」（中 41a8）
hiəi:/'a_ri. di_/'a_ni. /hʌ_miən. / 「計らなければ」（中 65b7）
cf. hiəi:'a. ri_go. / 「計り」（上 17a4）

② 'i_si_-「ある，いる」（通常アクセントはＬＬであるが，様態の語尾 ə や意図法先語末語尾 o が後続すると，ＬＨに変わる）が動詞に後続して，'i を脱落させた場合，si の部分のアクセントは句音調によって交替することがある。

sa_giə. /sio. dʌi_/ 「刻んであるには」（序 23b2）
nu_'ə. /si_ri. ra_] 「臥しているだろう」（上 81b7）
cf. du. sio_dʌi. / 「もっているが」（中 37a6）
dʌ_'oi_'ia. sio_mʌr. /爲'ui:/hʌ_ni. / 「なっているためであるが」（上 12b8）

③ di:nai-「経る，過ごす」は di:-「（日を）落とす」と nai:-「出す」が結合したものと見られる。しかし，nai が nai:-「出す」のアクセントを保持せず，かつ句音調にも従わない例がある。

di:nai_'io_ni. / 「過ごすが」（上 9b4）
cf. di:nai. 'io_dʌi. / 「過ごすが」（上 21b5）
di:nai_'ia. / 「過ごしてこそ」（序 6a8）

これは，di:nai_/'io_ni. / もしくは di:/nai_'io_ni. / のように解釈できる。前者の解釈は，独立性の高くない意図法先語末語尾 'io の前に句の切れ目が存在する点が問題であり，後者の解釈は，nai:-「出す」のアクセントを保持していない点が問題である。しかし di:nai- の nai は，nai:-「出す」とは別個の形態素として，Ｌのアクセントをもつと認識されていた可能性もある[33]。

例５） h を終声にもつ用言[34]

joh. -「清浄である」
jo. /ho. mʌr_/jo_ca. / 「清浄であることに随って」（上 92a2）
cf. jo. hi_/ 「清浄に」（上 2b7）
'orh. -「正しい」
'or. /hʌ_ni. ra_] 「正しいのだ」（上 33b1）[35]
cf. 'or. hʌ. ni_ra.] （上 85b1）
'or. hom_/ 「正しいこと」（上 51a6）

[33] 同様の例として，gən:nəi-「渡す」（＜gəd:-「歩く」＋nai:-「出す」，ただし子音同化と母音調和が生じている）がある。
gən:nəi_'io_mi. / 「渡すことが」（上 33b1）
gən:nəi_si_riə. ni_'oa. / 「お渡しになるだろうが」（上 33b2）
[34] dio:ta. /hʌ. si_go. / 「良いとおっしゃり」（中 102a4）も，hʌ_da. の縮約形 ta. を意識して，ta. の直前に句の切れ目があるか。
[35] ただしこの例は 'or. hʌ_n/i. ra_] のようにも分析できる。

1.1.3 1音節言い切り形

1音節言い切り形には，L，Hの２つの形が現れる（全部で 12 例中，2 例がHである）。

gʌd. do_da. /hʌ_go_] †　「同じだと言い」（序 19a7）
護 ho:/持 di_/hʌ_ra_] †　「護持せよ」（上 38a8）
ni_rʌ_'oad_di. /ma_ra. ji. ŋi_da. /hʌ_ra_] †　「起こしたくないのですと言え」（中 25a3）
不 bɨr. /敢 gam:/hʌn_dai_] †　「不敢と言うと」（上 42a1）
界 giəi:/ra_} †　「界である」（序 12b5）
慶 giəŋ:/讃 jan:/會 hoi:/ra_} †　「慶讃会である」（序 20b7）
懺 cam:/悔 hoi:/ra_] †　「懺悔である」（中 26a6）
妄 maŋ:/語'ə:/i, ra_} †　「妄語である」（上 44a7）
二 zi:/十 sib. /八 par. /祖 jo. /i, ra_} †　「二十八祖である」（序 3b7）
濟 jiəi:/度 do:/i, ni_ra_] †　「済度なのだ」（中 30a1）
門 mun_/bas_gɨi. /na.] †　「門の外に出て」（上 3b8）
禮 riəi:/數 su:/hʌ_go. /na.] †　「作礼して出て」（上 21a2）

「漢字/ra_/」や「漢字/i, ra_/」「漢字/i, ni_ra_/」は，本当に１音節の句音調なのか，という疑問も生じるかもしれない。「漢字/ra_/」は，前接の漢字音に繫辞 i が含まれており，ra_ の音調はそれを受けたもの（つまり２音節の句音調）とも考えられそうである。「漢字/i, ra_/」「漢字/i, ni_ra_/」も，実際にはそれぞれ２音節，３音節の句音調であったと解釈できそうである。しかし以下のように，ほとんどの接続形において，同様の例の句末は，Hで現れる[36]。

事 sʌ:/i, 'o. /　「事であり」（序 12b5）
一'ir. /切 ciəi. /ra.]　「一切である」（上 55a3）
般 ban. /若 zia:/i, ra.]　「般若である」（上 55a5）
天 tiən_/然 ziən_/外'oi:/道 do:/i, ni_ra.]　「天然外道なのだ」（中 99a7）

したがって「漢字/ra_/」，「漢字/i, ra_/」「漢字/i, ni_ra_/」は，言い切り形の例として考えた方がよい[37]。「漢字/i, ra. /」「漢字/i, 'o. /」は，２音節接続形ＨＨとも解釈できるかもしれないが，『六祖』の２音節接続形にＨＨが現れることは非常に少ないため，１音節接続形Ｈとして考えた方が無難である。つまり， i, は句音調に関与しないものである。

１音節言い切り形のＨとＬの違いは，次のように解釈できる。Ｈで現れているのは，２例とも na.「出て」である。Ｌで現れているのは，羅列の語尾 go，説明法語尾 ra，条件の語尾 ndai（＜冠形詞形語尾 n＋形式名詞 dʌ＋処格助詞 'ai）である。Ｈで現れているものは「原則的に句の切れ目を形成するもの」に属し，Ｌで現れているものは「原則的に句の切れ目を形成しないもの」「句の切れ目を形成したりしなかったりするもの」に属す。この「原則的に句の切れ目を形成する」という性質は，言い換えれば，「句音調による交替を起こさない」という意味である。したがって， na. の例は，１音節句音調の影響を受ける環境にはあるものの，その自立性の高さゆ

[36] Ｌで現れる例は以下の２例のみ。これらは例外的なものだろう。
一'ir. 千 ciən_數 su:/i, 'o_/　「一千数であり」（上 61a6）
道 do:/i, ra_/ni_rʌ_nʌ_ni. /　「道であると言うが」（中 46a7）

[37] nira は無核の用言の後では通常 ni. ra で現れるが，同様に無核と見なせる「漢字/」及び「漢字/i, 」の後では ni_ra で現れている。cf. 懺 cam:悔 hoi:/ni_ra.]　「懺悔なのだ」（中 46b7），菩 bo_提 ri_/ni_ra.]「菩提なのだ」（上 59b8），天 tiən_/然 ziən_/外'oi:/道 do:/i, ni_ra.]　「天然外道なのだ」（中 99a7）

え，句音調の影響を受けず，それ自身のアクセントで現れているのだと解釈できる。

1.1.4 2音節接続形

２音節接続形はＨＬもしくはＨＨで現れるが，ほとんどの例はＨＬである(具体的には，語尾が末尾に来る２音節句音調の 98.75%, 助詞が末尾に来る２音節句音調の 94.90%がＨＬである。詳細は 1.2 を参照）。したがって，『六祖』においてＨＨは例外的な句音調ということになる。

ＨＨで現れるもののうち，H/H（句の切れ目が生じているもの）ではないものの傾向を，いくつか以下にまとめる(ただし, これらの傾向･条件を満たせば必ずＨＨで現れるわけではない)。

Ⅰ． ＨＨは，何か２つのもの・ことを対比させたり，いくつかの状況・動作などを並べ立てる場合に現れやすい。

- ’a_bi. ras. /mʌ_zʌm_/jis：di_/mar：miə_/sdo. /’a_dʌ. ri_ras. /mʌ_zʌm_/jis：di_/mar：miə_/「父という想を作さず，また子という想を作さず」（中 70b2）
- na_rag. /dɨr. rag. /hʌ. ’ia_/ 「出たり入ったりして」（序 21a1）
- 世 siəi：/間 gan_/sa：rʌ_mi. /sar：miə. /jug_nʌn_/’i：ri_/kɨ. ni_/ 「世間の人が生き死ぬことが大きいが」（上 10a5）
- 爐 ro_/nʌn. /burm_gi. ’o. /錘 tiu_/nʌn. /ma_ci. ni_/ 「爐はふいごであり, 錘は金槌であるが」（序 6a8）
- 壇 dan_/経 giəŋ_/’i. /mar：sʌ_mʌn. /jiəg：go. /bdɨ. dɨn_/豊 puŋ_/hʌ_miə. /理 ri：/i, /bʌrg_go. /事 sʌ：/i, /gʌ_ja. / 「壇経が言葉は少なく，義は豊かであり，理が明らかで，事が備わり」（序 6b4）

Ⅱ． 羅列の語尾 ’o/go や 様態の語尾 ’ia/’iə などは，対比的・並列的構造の文に使われやすい。そのためか，必ずしも対比的・並列的構造の文でなくても，これらの語尾を伴うとき，２音節接続形ＨＨが現れることがある。

- du：/奇 gɨi_/異’i：/hʌn_/jiuŋ：/’i. /na_za. /boi：’o. /師 sʌ_/s, /’a_bi. /dʌ_riə. /nir_’o. dʌi_/ 「２人の奇異な僧が進んで謁し，師の父に言うには」（序 10a3）
- 師 sʌ_/’ɨi. /ni_rʌ_sia. mʌr_/dɨd_/jʌb：go. /sgʌi. dʌ_ra. /’a：di_/’a_ni. /hʌ_ni. /’əb：sə_/ 「師のおっしゃることを聞き申し上げ，悟り知らないことはなく」（上 83a7）
- 曹 jo_/渓 giəi_/s, /洞 doŋ：/口 gu：/di：na. da_ga. /mɨ. rɨr_/’u_hɨi. ’iə. /ma_si. ni_/ 「曹渓の洞口を経てから水を掬って飲んだが」（序 18b6）
- boi：’ia. /gʌ_rʌ_ci. sia_mʌr. /nib_di. /mod：/hʌ. ’iais. da_ni. / 「示し誨えることを蒙らずにいたが」（中 78b5）

Ⅲ． 共同格助詞 ’oa/goa が連続的に使われて，「～と～と」のような構造をなす場合も，ＨＨが現れやすい。これも一種の並列的構造と言えるか。

- ’os. goa_/法 bəb. /goa. rʌr. / 「衣と法とを」（序 11a8）[38]
- mor：rom_goa. /’a_rom. goai. / 「迷と悟とが」（中 65a5）

[38] この例は 法 bəb. /goa. /rʌr. / のように分析される可能性もある。mɨi_’um. goa_/dʌz：’om_goa. rʌr. /「憎と愛とを」（上 81b6）の例も同様か。なお趙義成（2002：31）は『月印釈譜』のアクセントに関して，「羅列を表す‘-oa/-goa’では去声が３つ以上連続することができる。‘-oa/-goa’の直前にアクセント上の境界があるものと推測される。」と述べている。また菅野裕臣（1982：5）も参照。

・ mʌ_zʌm_goa. /’ib. goai. /　「心と口とが」（上 50b6）
・ mom. goa. /mʌ_zʌm_goai. /　「体と心とが」（上 96b1, 2）

Ⅳ．　対格助詞 ʌr/rʌr を伴う句にもしばしば現れる。ＨＨは，ʌr/rʌr，’o/go，’ia/’iə，’oa/goa など特定の語尾・助詞に多く現れる傾向がある，とも解釈できるかもしれない[39]。

・ ’i. jəi_/hʌ_ma. /’a_ro. mʌr. /得 dɨg. /ho. ni_/　「今既に悟りを得たので」（上 33b7）
・ 維’iu_/摩 ma_/経 giəŋ_/bo：mʌr. /因’in_/hʌ. ’ia_/　「維摩経を見ることに因って」（中 98b4）
・ hɨr_ru. mɨr. /jo_ca. /　「流れに随って」（序 19a2）
・ ’ə. mi_/piən_’an_hi. /’is_gəi. /ho. mʌr. /mʌs_go. /　「母を安置することを畢わり」（上 6a4）
・ gɨ_/ma：rʌr. /bɨ_tə. /hʌ_ni. ra_］†　「その言に依ってしたのだ」（序 17b4）
・ mɨ_sɨs. /’i：rʌr. /bʌi_ho. də_nio. ］　「何事を学んだか」（中 55a2）

1.2『真勧』『三壇』

『真勧』と『三壇』は２つ併せて刊行されたものであるため，これらの音韻的性質は共通していると予想される。しかし『真勧』『三壇』それぞれの句音調にはかなりの違いがある。

『真勧』と『三壇』は，『六祖』のような言い切り形・接続形の明白な区別がない点[40]，３音節，４音節，５音節の句音調がそれぞれＨＬＨ，ＨＨＬＨ，ＨＬＨＬＨである点などは共通している。両者の違いを端的に示すのは，２音節句音調の現れ方である。原則的に句の切れ目を形成しない語尾・助詞を句末要素にもつ場合について，『六祖』『真勧』『三壇』の２音節句音調を分類すると，表２・３のようになる（比較的用例の多い語尾・助詞に限定する）。表２・３では，表記が不明確なものや，２音節句音調であるかどうか判断が難しいものは除く。

機能	形態素	『六祖』			『真勧』			『三壇』		
		ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率	ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率	ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率
意向	riə	1	4	80.00	1	1	50.00	0	2	100.00
冠形詞形	(ʌ/ɨ)n	1	18	94.74	6	11	64.71	2	11	84.62
	(o/u)n	0	4	100.00	0	1	100.00	5	2	28.57
	nʌn	0	28	100.00	2	8	80.00	1	1	50.00
	non	0	8	100.00	1	0	0.00	1	2	66.67
	r	2	3	60.00	0	1	100.00			
原因	ni	2	153	98.71	24	4	14.29	2	3	60.00
条件	miən	2	88	97.78	1	0	0.00	1	0	0.00
譲歩	odʌi	0	280	100.00	7	4	36.36	0	4	100.00
説明法	da	0	8	100.00	3	4	57.14			
	ra	0	200	100.00	22	20	47.62	1	11	91.67
到達	’əi	0	3	100.00				1	2	66.67
	gəi	0	8	100.00	3	2	40.00			
否定対象	di	0	134	100.00	8	6	42.86	1	3	75.00
並行	miə	1	66	98.51	6	6	50.00	4	4	50.00
命令法	ra	0	43	100.00	0	2	100.00	0	6	100.00
	siosiə	0	8	100.00	6	6	50.00	1	5	83.33
様態	’a	0	26	100.00	3	1	25.00	0	3	100.00
	’ia	1	356	99.72	30	11	26.83	0	16	100.00

[39] その他，冠形詞形語尾 r を伴う場合もＨＨの現れる比率が高い。
[40] ただし『三壇』には，若干であるが，１音節言い切り形と見られる形がある。
法 bəb. /界 giəi：/ra_｝　「法界である」（3a6）
偈 gəi：/ra_｝　「偈である」（41a3）
妙 mio：/菩 bo_/提 ri_/座 joa：/i, ra_/hʌ_miə. /　「妙菩提座であると言い」（11b1）
實 sir_/報 bo：/無 mu_/障 jiaŋ：/碍’ai. /土 to. /i, ra_/hʌ. nʌ_ni. /　「実報無障碍土であると言うが」（11b2）

	a	3	37	92.50	34	9	20.93	1	16	94.12
	’ə	0	2	100.00	0	1	100.00			
	’iə	1	22	95.65	7	1	12.50	0	2	100.00
	ə	1	69	98.57	6	3	33.33	0	5	100.00
羅列	’o	3	124	97.64	15	3	16.67	4	15	78.95
	go	4	47	92.16	14	2	12.50	1	7	87.50

表 2　２音節句音調（語尾）

		『六祖』			『真勧』			『三壇』		
機能	形態素	ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率	ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率	ＨＨ	ＨＬ	ＨＬ比率
共同格	’oa	0	6	100.00	1	0	0.00	4	0	0.00
	goa	5	9	64.29	7	0	0.00	0	2	100.00
	koa				1	0	0.00	2	0	0.00
具格	ʌro				1	1	50.00			
	’ɨro	0	36	100.00	16	4	20.00	4	7	63.64
	ɨro	0	4	100.00						
	ro	0	30	100.00	7	1	12.50	0	8	100.00
主格	’i	0	1	100.00	1	0	0.00			
	i	5	254	98.07	23	13	36.11	1	22	95.65
主題	ʌn	0	38	100.00	15	1	6.25	0	1	100.00
	n	0	11	100.00	6	2	25.00	0	1	100.00
	nʌn	0	21	100.00	5	0	0.00			
	ɨn	0	16	100.00	4	0	0.00			
処格	’ai	0	4	100.00	1	0	0.00			
	ai	1	30	96.77	6	1	14.29	2	2	50.00
	’əi	0	1	100.00	1	0	0.00			
	’iəi	1	9	90.00	2	0	0.00			
	əi	0	10	100.00						
属格	s	1	11	91.67	8	1	11.11	2	2	50.00
対格	ʌr	12	151	92.64	23	5	17.86	3	8	72.73
	rʌr	11	25	69.44	6	0	0.00	4	2	33.33
	’ɨr				1	0	0.00			
	ɨr	2	40	95.24	12	3	20.00	4	0	0.00

表 3　２音節句音調（助詞）

このように，２音節句音調ＨＨ，ＨＬの比率は，３文献の間でかなり異なっている。『真勧』はＨＨで現れる場合が多く，『三壇』はＨＬで現れる場合が多い。ただし『三壇』は，『六祖』ほどＨＬの比率が高くない。また『六祖』は，２音節句音調ＨＬの比率が，語尾・助詞の間で大きく違わないが，『真勧』『三壇』はそれらの間の違いも大きい（上表に挙げたものに限定すると，ＨＬの出現率は，『六祖』語尾 98.75%，助詞 94.90%，『真勧』語尾 34.97%，助詞 17.88%，『三壇』語尾 82.19%，助詞 67.90%になる。それ以外の例を加えても，これらの比率に大きな変化はない。）。『真勧』『三壇』『六祖』それぞれの句音調は，基本的に性質が異なるものだと言える[41]。

それでは，『真勧』『三壇』それぞれの句音調の体系とは，どのようなものなのだろうか。

15 世紀中葉の文献に見られる句音調は，２音節ＨＨ，３音節ＨＬＨ，４音節ＨＨＬＨ，５音節ＨＬＨＬＨ，が基本であり，稀に２音節ＨＬ，３音節ＨＨＬ，４音節ＨＬＨＬなどが見られる（後者で現れるものは，体言単独形，副詞，冠形詞，冠形詞形，引用形など[42]）。しかし『杜詩諺解』など 15 世紀後半の文献では，２音節句音調の多くがＨＬで現れるようになる[43]。

『真勧』の２音節句音調ＨＬの出現比率がＨＨよりも少ない点は，15 世紀中葉の文献に近い。『三壇』の２音節句音調ＨＬの出現比率はかなり高いが，『六祖』ほど徹底してはいない。『六祖』

[41] その他，『三壇』には例外的句音調がほとんど見られないが，『真勧』にはいくつかある，という違いもある。
[42] cf. 福井玲（1985：69-70）。
[43] cf. 金完鎮（1973：110），門脇誠一（1976：22）。

の２音節句音調は，ほぼＨＬに統一されている。このことから，『真勧』『三壇』『六祖』それぞれの状態は，15 世紀中葉から後半にかけて生じた句音調体系の変化を段階的に反映したものと捉えることができるかもしれない。

一方，『六祖』『真勧』『三壇』は，助詞よりも語尾の方がＨＬの比率が高い点で共通している。15 世紀中葉文献では，語尾，助詞が付くものは，冠形詞形や引用形などを除き[44]，基本的にＨＨで現れる。したがって一部に見られたＨＬが拡大する中で，助詞のＨＨは比較的保たれる傾向があった，と推測できる。

この傾向が意味することを解釈するためには，そもそも 15 世紀中葉の文献において，ＨＨとＨＬがどのような関係にあったかを知る必要があるが，上述した出現の分布以外，現時点では不明である。ＨＨ，ＨＬのどちらか一方が接続形で，もう一方が言い切り形，という解釈も成り立つかもしれないが，いずれにしても『六祖』のようなタイプの区別ではない。

しかし，これら３文献において，語尾よりも助詞のＨＨ出現率が高いことは，少なくとも中期朝鮮語のある段階において，接続形ＨＨ・言い切り形ＨＬの区別が生じた可能性を示唆する。助詞で終わる句は，語尾に比べ，それだけで文が成立することが少ない。そのことが接続形ＨＨの句音調に反映されていると見られるためである[45]。

その他，『真勧』『三壇』の句音調に見られる傾向（「句の切れ目」の生じる基準など）は，細かな違いはあるものの，大体において『六祖』と一致する。

2. 母音調和

中期朝鮮語語尾・助詞のいくつかと媒介母音には，母音調和によって交替する異形態がある。陽母音（a，ʌ，o）は陽母音同士，陰母音（ə，ɨ，u）は陰母音同士で結合し，中性母音 i の語幹はどちらにも結合し得るのが原則である。母音調和は，中期朝鮮語初期において，既にかなりの混乱を生じていたが，その混乱の程度や傾向は文献によって異なっている。

2.1 先行研究

韓榮均（1994：108-113）は，『六祖』『真勧』『三壇』の母音調和について，次のように指摘している。

- 固有語体言と処格助詞（’)ai/(’)əi の母音調和には例外がない。主題の助詞 nʌn/nɨn，対格助詞 rʌr/rɨr は nʌn，rʌr に一本化している。
- 陽母音固有語体言と陰母音助詞（’)ɨn（主題），(’)ɨr（対格）が結合する例外は『六祖』のみに見られ，従来の研究において『真勧』『三壇』を『六祖』と同じ性格の資料として扱っていることと相反する（この場合だけでなく，固有語と格助詞の母音調和全般に渡って，同様の傾向がある）。例外となる体言は，basg 「外」を除きすべて語幹末音が m である。

---

[44] 『真勧』では 15 世紀中葉文献と同様，冠形詞形のＨＬ出現率も高くなっている。しかし『三壇』では，冠形詞形（o/u)n，nʌn，non のＨＬ出現率が他の語尾よりも低めである。

[45] ただし金完鎮（1973：109-110）によれば，『般若経諺解』ではＨＨ＞ＨＬの変化が主格助詞 i にのみ現れ，他の格においてはまだこのような変化が生じていないという。『三壇』『六祖』における主格助詞のＨＬ比率はかなり高い。『真勧』の i のＨＬ比率も，助詞の中では相対的に高めである。

- 陰母音固有語体言と陽母音助詞（’)ʌn（主題），（’)ʌr（対格）が結合する例外も『六祖』にのみ発見される。例外は，語幹末音が r，h である。
- 陽母音固有語体言と陰母音助詞（’)ɨi （属格・処格）が結合する例外 22 個のうち，21 個が『六祖』に現れる。例外となる語幹は dosg 「席」，basg 「外」のみである。陰母音固有語体言と陽母音助詞（’)ʌi（属格・処格）が結合する例外はない。
- 漢字語と助詞との結合においても，’ai/’əi には母音調和の例外がほとんどない。 nʌn/nɨn，rʌr/rɨr はやはり nʌn，rʌr に一本化している。
- 陽母音漢字語と陰母音助詞 ’ɨn，’ɨr，’ɨro （具格），’ɨi が結合する例外は非常に多いのに対し，陰母音漢字語と陽母音助詞 ’ʌn，’ʌr，’ʌro （具格），’ʌi が結合する例外はほとんどない。漢字語と助詞との結合において，これらの助詞は陰母音系列に一本化している。
- 用言語幹と冠形詞形語尾 ʌn/ɨn，ʌr/ɨr が結合する母音調和には，１つの例外もない。

これらの指摘のうち，特に，『六祖』と『真勧』『三壇』の関係についての指摘は重要である。母音調和において，少なくとも『六祖』と『真勧』『三壇』が異なる性質をもっているという事実は，句音調の現象と符合する。

2.2 『真勧』と『三壇』の違い

『真勧』と『三壇』の母音調和には，違いは見られるのだろうか。

『六祖』『真勧』『三壇』の母音調和について統計をとり[46]，表４・５・６にまとめる[47]。 ’ で始まる助詞は「漢字＋漢字音」，固有語（ハングル表記の漢字語も含む）の両方に接続可能である。表中の ’ で始まる助詞に続く「漢」「固」は，それぞれ漢字音，固有語に付いた場合を指す。「陽」「陰」「中」はそれぞれ陽性，陰性，中性を表す。陽性・陰性母音をもっていても，語幹末に中性母音や下向二重母音の i をもつもの，中声が iə のものは，一部の母音調和において例外的な対応をすることがあるため，別に記す（それぞれ「陽 i」「陰 i」「iə」）[48]。これらは，母音調和の例外比率（表の「例外」）の計算には含めない。

機能	形態素	『六祖』							『真勧』							『三壇』						
		陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外
意図法	’o	2						0.00								1		1				50.00
	’io		33		14					3							1		5			
	o	371	28	62	12	6	190	14.32	71	7	1	4		13	1.39	40	2	6			4	13.04
	’iu				2																	
	u		1	39	1	1	9	0.00			10	2	1	1	0.00			1				0.00
様態	’a	27						0.00	4						0.00	4						0.00
	’ia	384[49]	23					0.00	38	13					0.00	17	1					0.00
	a	275	3				4	0.00	80	1					0.00	52					2	0.00
	’ə			2				0.00			1				0.00							
	’iə		1		27		1			3		7							2		1	
	ə		45	148	20	30	63	0.00		10	30	4	4	13	0.00		3	22		2	4	0.00

[46] 原則として語幹末の音節の性質に基づいて分類する。母音調和の及ぶ範囲を決定する際には，上述した句音調の性質も考慮に入れる。形式名詞 dʌ，sʌ，名詞 bsgɨi 「時」に助詞が付いた場合，尊敬法先語末語尾 si に語尾 a（様態，意図法）が付いた場合，*vʌ に由来する o か意図法先語末語尾の o であるかが判断しにくい場合などは統計に含めない。

[47] nʌn，rʌr に対し，nɨn は 0 例，rɨr の例はほとんど見られないため，表には挙げない。

[48] cf. 門脇誠一（1982，1986）。

[49] hʌ_-「する」の例である。『真勧』『三壇』でも同様。

表 4　母音調和（語尾）

機能	形態素	『六祖』							『真勧』							『三壇』						
		陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外
具格	ʌro	14						0.00	6						0.00	2		1				33.33
	ʼɨro 漢	10		5		10	5	66.67	1	2	3		5	9	25.00			5		2	4	0.00
	ʼɨro 固	8						100.00														
	ɨro	3		2		1	2	60.00														
主題	ʼʌn 漢	15		1		1	8	6.25	7	1					0.00	2	1					0.00
	ʌn	63		2	2		2	3.08	24						0.00	1						0.00
	ʼɨn 漢	27	4	34		27	22	44.26	2	2	9		9	3	18.18	4		3		13	1	57.14
	ʼɨn 固	9		4				69.23														
	ɨn			18	2		1	0.00			2	3			0.00							
処格	ʼai 漢	93	3					0.00	37	1					0.00	24	1		1			0.00
	ʼai 固	6						0.00	3						0.00	1						0.00
	ai	93	1	2				2.11	21	1					0.00	7						0.00
	ʼəi 漢		1	112		80	26	0.00			32		9		0.00			11		5	1	0.00
	ʼəi 固			1				0.00			1				0.00							
	əi			13	3	2	17	0.00			7				0.00			1				0.00
処格 属格	ʼʌi 漢	8						0.00	5	1					0.00	1	1					0.00
	ʌi	43						0.00	2						0.00	5						0.00
	ʼɨi 漢	29	4	17	1	11	14	63.04	3		6	1	1	2	33.33	1		2	1		2	33.33
	ʼɨi 固	1			1	1		100.00														
	ɨi	22		15		4	5	59.46			3				0.00	1					3	100.00
対格	ʼʌr 漢	10	2			2	1	0.00	26	2					0.00	4	1					0.00
	ʌr 固	1						0.00	1						0.00							
	ʌr	190		5			6	2.56	43					2	0.00	27					1	0.00
	ʼɨr 漢	101	15	97		157	48	51.01	10	3	33		12	9	23.26	10	3	15		11	7	40.00
	ʼɨr 固	30		2			1	93.75	0		1				0.00							
	ɨr	9		48			3	15.79	0		23			2	0.00			3			1	0.00

表 5　母音調和（助詞）

形態素	『六祖』							『真勧』							『三壇』						
	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外	陽	陽 i	陰	陰 i	iə	中	例外
ʌ	105						0.00	62	2					0.00	29						0.00
ɨ	1		176		7	25	0.56			17	1	3	9	0.00			28		1	3	0.00

表 6　母音調和（媒介母音）

これらの表から分かるように，『真勧』と『三壇』の母音調和は，大体において類似している。しかし，次のような違いもある。

まず，意図法先語末語尾の例外が，『三壇』に若干多い。『真勧』の意図法の用例が多いことから，これらは有意味な違いと見てよいかもしれない[50]。

次に，陽母音漢字音に陰母音助詞が付く例外の割合が異なる。『六祖』『真勧』『三壇』における漢字音と助詞の結合は，具格が ʼɨro に一本化している点，処格 ʼai/ʼəi が原則的に母音調和に従っている点では共通している。しかし，陽母音漢字音と ʼʌn/ʼɨn，ʼʌi/ʼɨi，ʼʌr/ʼɨr が結合する場合の例外比率は，表７のように異なっている。

	『六祖』		『真勧』		『三壇』	
	陽	陰	陽	陰	陽	陰
ʼʌn	15	1	7		2	
ʼɨn	27	34	2	9	4	3
陰母音助詞が付く割合	64.29	97.14	22.22	100.00	66.67	100.00
ʼʌi	8		5		1	
ʼɨi	29	17	3	6	1	2

[50] 『六祖』にも意図法の例外は多い。また『六祖』『真勧』『三壇』のすべてにおいて，例外は，陰母音語幹＋陽母音意図法である。

陰母音助詞が付く割合	78.38	100.00	37.50	100.00	50.00	100.00
’ʌr	10	97.14	26		4	
’ɨr	101	97	10	33	10	15
陰母音助詞が付く割合	90.99	100.00	27.78	100.00	71.43	100.00

表 7　陽母音漢字音に陰母音助詞が付く例外

『六祖』と『三壇』は，陽母音漢字音に陰母音助詞が付く例外が比較的多く，漢字音に付く助詞が陰母音に一本化しつつあると見られるが，『真勧』の陽母音漢字音は陰母音助詞と結合する比率が低い。

全体として，『真勧』では，『六祖』『三壇』よりも母音調和が守られている。

以上より，『六祖』と『真勧』『三壇』の間だけでなく，『真勧』と『三壇』の間でも，母音調和の性質が異なっていたと言える[51]。

2.3 『六祖』における分綴表記と母音調和

韓榮均（1994）が指摘するように，『六祖』には固有語体言と助詞が結合する母音調和に多くの例外が見られる。韓榮均（1994）はこれらの例外について，「語幹末音が m」「語幹末音が r, h」「dosg，basg のみ」などの指摘をしているが，この指摘には若干の不備がある。筆者は，この問題は，助詞が分綴表記される場合とされない場合とに分けて検討する必要があると考える。まず分綴表記される場合の例外は以下の通り。

mʌ_zʌm_’ɨ. ro_/　「心で」（序 3b5，上 31a4，中 40b3）
mʌ_zʌm_’ɨn. /　「心は」（上 15b7，96a6，中 58a3[52]，63a2）
mʌ_zʌm_’ɨr. /　「心を」（序 3b6，上 3a4，4b2，12b3，中 19b5，31a1，41a6，56b4 など）
mar:sʌm_’ɨr. /　「言葉を」（上 77b3）
sa:rʌm_’ɨ. ro_/　「人に」（上 15b3，18b2，23a6，28b6，71a6）
sa:rʌm_’ɨi. /　「人の」（中 73b1）
sa:rʌm_’ɨn. /　「人は」（上 69a2，72a5，81a8，中 68b5，91b7）
sa:rʌm_’ɨr. /　「人を」（上 25b2，68b5，68b6，81b8，88b3，中 63a4）

例外になっているのは，mʌzʌm「心」，sarʌm「人」，marsʌm「言葉」の３語である。韓榮均（1994）はこれらについて「語幹末音が m である」と指摘している。それは事実であるが，これらの単語が連綴表記されている場合，母音調和はすべて規則的である。

mʌ_zʌ_mʌi. /「心の」（上 15b5）
mʌ_zʌ_mʌr. /「心を」（上 2b7）
mar:sʌ. mʌ_ro. /「言葉で」（序 20b3）
mar:sʌ_mʌn. /「言葉は」（序 6b3，上 41b4，中 99b1）
mar:sʌ_mʌr. /「言葉を」（序 5a3，上 86a3，中 93b7）
sa:rʌ_mʌi. /「人の」（序 24a1，上 15b1，39b8，中 8b3，18a6，18b3 など）
sa:rʌ_mʌi. /gəi_/「人に」（上 69a2，中 65a5）
sa:rʌ_mʌn. /「人は」（上 10b8，11a4，27b1，47b2，中 2a8，10b3 など）
sa:rʌ_mʌr. /「人を」（上 68a8，中 62b7）

[51] 『三壇』は ɨi，ʌro にも例外がある。nu. nʌ_ro. /　「目で」（43a7），’an. pas_gɨi. /　「内外に」（8 之 2a7）。
[52] ただし ’ɨn のアクセントははっきりしない。

『六祖』では，分綴表記される場合，語幹の直後にイントネーション句の切れ目が生じる。分綴表記されたものに母音調和の例外が多く見られるのは，このように語幹の直後に句の切れ目があるためではないかと予測できる[53]。

更に，これらが陰母音助詞をとることは，直前に句の切れ目がある場合（単独で現れる場合）に現れるのが陰母音助詞である，つまり，陰母音助詞がいわば無標の形であったと考えることで説明される。このことは，漢字音（前後に句の切れ目を伴う）の多くが陰母音助詞をとることと符合する。

次に，分綴表記されない場合の例外は以下の通り。

’an. pas_gɨr. /　「内外を」（中 60a4）
’ir_’u. mʌn_/　「成すことは」（中 30b8）
’ə_dɨ. ’u_mʌr. /　「暗さを」（中 43a2）
’əb：so_mɨr. /　「ないことを」（中 73a2，74b6，81a2）
’ər_gu_rʌr. /　「形を」（序 21a2）
bas_gɨ. ro_/「外に」（上 67a1，72a5，98b2）
bas_gɨi. /　「外に」（上 3b8，19b2，37b4，87a7，中 9b8，14b7，15a1，15a2，16a1 など）
bas_gɨis. /　「外の」（上 73a6，中 39a3）
bas_gɨr. /　「外を」（上 55a7，96b4，中 23a6，37b5，62b4）
bsu. mai_/「用いることに」（上 10b8）
dos_gɨi. /　「席に」（上 41b2，中 68b6）
du_pu. mʌr_/　「覆うことを」（中 38a7）
dur：hʌn_/　「二は」（序12b5）
hə_mɨ. rʌr_/　「過ちを」（上 80a2，102a1）
ju：mai_/「与えることに」（上 102a5）
tos. gɨi_/　「兎の」（上 82a5）

韓榮均（1994）が指摘する例外（語幹末音 r，h のもの[54]，dosg，basg）の他，tosg「兎」[55]，名詞形語尾 om/um の例もある。名詞形語尾の例は，’əb：so_mɨr. / 以外はすべて陽母音助詞が付いたものである（ただし’əb：so_mɨr. / は，既に語幹部分 ’əbs： と意図法先語末語尾 o の間で母音調和の例外が生じている）。この現象は，陰母音語幹に陽母音意図法先語末語尾が付く例外が多いこととも関係があるかもしれない。

3．結論

本稿では，『六祖』『真勧』『三壇』の音韻について比較・分析した結果，以下の結論を得た。

① アクセントは，３文献の間に大きな違いがない。
② ３文献の句音調の体系は，まったく異なる。概略的には，『真勧』が15世紀中葉中期朝鮮語の句音調体系に最も近く，次いで『三壇』，『六祖』の順に体系が変わっていく。
③ 母音調和は，『六祖』と『真勧』『三壇』とで性質が違っている。『真勧』と『三壇』の間にも，意図法先語末語尾，漢字音に後続する助詞の母音調和などに違いが見られる。『真勧』が最も厳密に母音調和に従っている。

[53] ただし don：/’ʌr. / 「お金を」（上 3b7）は，分綴表記と句の切れ目を伴っているにも拘わらず，母音調和は例外になっていない。
[54] 下向二重母音の例であるが，nəi：hʌn_/　「四は」（序 12b5），səi：hʌn_/　「三は」（序 12b5）もある。
[55] tosg は tosgi でも現れる。dosg，basg，tosg はすべて末子音が sg である。

④　『六祖』では，分綴表記が句音調・母音調和に影響している現象が見られる。『真勧』『三壇』にはこのような現象は見られない。

また本稿では取り上げなかったが，これらの文献には次のような特徴もある[56]。

⑤　漢字音は，３文献の間にいくつか個別的な違いがあるものの，全体的には同じものである。

⑥　『真勧』と『三壇』における真言・陀羅尼の用字およびハングル転写は，かなり異なる。

このように，従来同一人物によって作成されたと考えられてきたこれら３文献は，多くの点において異なっている[57]。類似しているアクセント・漢字音は，中期朝鮮語全体においても，文献間の違いが比較的小さい。

これらの違い，とりわけ句音調の違いは，大きな意味をもつ。各文献の句音調の違いが方言差を反映しており，３文献を執筆した人物がこれらの方言を使い分けていた，と見ることも可能かもしれないが，同時期に同様の形態で刊行する文献において，同一人物がそれらの方言を使い分ける必要があったとは考えにくい。したがって，『六祖』『真勧』『三壇』はすべて別の人物によって作成された蓋然性が高い。

参考文献

『六祖法寶壇經諺解（上)』　1983　ソウル：弘文閣
『六祖法寶壇經諺解（中)』　1992　ソウル：弘文閣
『眞言勸供・三壇施食文諺解』　1997　ソウル：弘文閣

安秉禧　1992　『國語史資料研究』　ソウル：文學과知性社
伊藤智ゆき　2002a　「『六祖法宝壇経諺解』の句音調」　朝鮮語研究会（編)『朝鮮語研究１』: 109-127.　くろしお出版
――― 2002b　「朝鮮漢字音研究」　東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
伊藤英人　2003　「講経と読経―正音と読誦を巡って―」　『朝鮮語研究会第 200 回記念大会国際学術大会発表論文集』: 47-59.
門脇誠一　1976　「中期朝鮮語における声調交替について」　『朝鮮学報』79：17-54.
――― 1982　「中期朝鮮語における母音調和の乱れについて―特に語基母音ㅗ/ㅜを中心に―」　『朝鮮学報』102：1-28.
――― 1986　「再び中期朝鮮語における母音調和の乱れについて―特に第Ⅲ語基母音 a/ə を中心に―」　『朝鮮学報』119-120：1-11.
韓榮均　1994　「후기중세국어의 모음조화 연구」　서울大學校大學院文學博士學位論文
菅野裕臣　1982　「中世韓国語의 声調에 대하여」　韓国精神文化研究院　発表要旨
金完鎮　1973　『國語學叢書４　中世國語聲調의 研究』　ソウル：塔出版社
金星奎　1994　「中世國語의 聲調에 대한 研究」　서울大學校大學院文學博士學位論文
金東昭　2000　「《육조 법보 단경 언해》 하권의 국어학적 연구」　『六祖法寶壇經諺解（下)』: 1-30.　ソウル：弘文閣
志部昭平　1983　「乙亥字本楞厳経諺解について」　『朝鮮学報』106：1-24.
趙義成　2002　「中期朝鮮語アクセント小攷」　朝鮮語研究会（編)『朝鮮語研究１』: 57-64.

[56] cf. 拙稿（2002b)。

[57] その他，『六祖』には ’ə’iəsbi 「憐れに，いとおしく」と並んで ’ə’iəisbi という語形も現れるが，『真勧』『三壇』には前者だけが現れるという違いもある。また『六祖』『真勧』には到達の語尾として gəi だけが現れるが，『三壇』には gəi，gii の２種類が現れる。

くろしお出版
福井玲　1985　「中期朝鮮語のアクセント体系について」　『東京大学言語学論集'85』: 61-72.
———　1989　「中期朝鮮語文献の電子計算機による処理」　『明海大学外国語学部論集』2 : 17-29.